［インタビュー］

言語的相互承認を通じた包摂

バルセロナ、ミラ・イ・フンタナルス小学校[1] 校長
ロザ・ククルイスさんに聞く

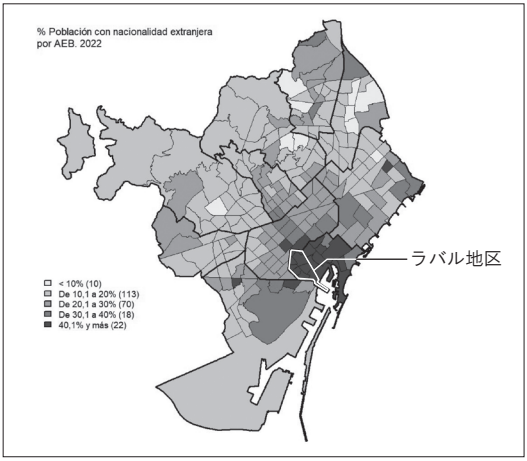
インタビュー・構成：
塚原信行
つかはら・のぶゆき

言語的超多様性都市　バルセロナ

スペインでは、2000年代に入り国外からの移民が急増し、2011年には外国籍人口が約575万人（人口比12.3%）に達する。その後徐々に減少し2017年には457万人となるが、2018年からは再び増加に転じ、2022年には554万人（人口比11.6%）に至る。特に大都市部は移民の流入が多く、人口数上位3都市の2022年のデータを見ると、首都マドリードの外国籍人口は約52万人（人口比15.8%）、バルセロナでは約36万人（人口比22.2%）、バレンシアでは約11万人（人口比14.4%）となっている。こうした状況において、移民が携えてくる言語への扱いはさまざまである。特に、マイノリティ化された言語（llengua minoritzada / minoritized language）が話されている地域では、従来からのマイノリティ化言語保護振興政策との関係から、その扱いは悩ましい。当該地域におけるマイノリティ化された言語の将来は、新たに出現したこの言語的多様性をどのようにマネジメントするかにかかっているといっても過言ではない。この代表的な事例が、カタルーニャ自治州の州都バルセロナである。

カタルーニャ自治州は1980年代以降、全住民のバイリンガル化（スペイン語とカタルーニャ語）を通じてカタルーニャ語の維持を目指す言語政策を展開し、その要諦は公教育におけるカタルーニャ語イマージョンであった。「カタルーニャ語を学ぶ」のではなく「カタルーニャ語で学ぶ」というカタルーニャ語イマージョンにより、マジョリティ言語であるスペイン語話者の大多数を、マイノリティ化

図　バルセロナの行政区ごとの外国籍人口比率を示す図（2022年）。色が濃いほど比率が高い。白枠で囲まれているのがラバル地区。



出典：バルセロナ市役所統計局による図を一部加工
https://ajuntament.barcelona.cat/estadistica/catala/index.htm

言語であるカタルーニャ語とのバイリンガル話者に転換してきたのである。言語政策上考慮すべきは、基本的には、スペイン語とカタルーニャ語であった。しかし、2000年代以降の移民の流入は、カタルーニャ自治州、特に州都バルセロナにおける言語的多様性を急速に促進し、現在では300を超える言語が話されているとされる（Linguapax 2019）。カタルーニャ自治州における言語政策は、こうした言語的超多様性を前提としなければならなくなった。

バルセロナは10の行政区（Districte）から構成されており、旧市街に該当するシウタッ・ベリャ（Ciutat Vella）が最も面積が小さい（約4.1平方キロメートル）と同時に外国籍人口比率が最も高く、実に52％[2)] ほどに達する（人口約10万6千人のうち5万5千人程度が外国籍）。シウタッ・ベリャ行政区はさらに4つの地区に分割されており、そのうちの1つであるラバル地区が、最も面積が小さく（約1.1平方キロメートル）、最も人口が多く（約4万7千人）、さらに、最も子ども（0歳-15歳）人口比率が高い（約14％）**（図）**。ラバル地区は、狭い空間に、出身地を異にする多くの外国人が居住し、しかも子どもが多い、という場所なのである。また、1980年代から都市再生計画が進められた結果、ラバル遊歩道

（Rambla del Raval）に代表される公共空間が整備され、従来から存在するカタルーニャ図書館やリセウ大劇場といった学術文化施設に、バルセロナ現代美術館、バルセロナ現代文化センター、バルセロナ大学地理歴史学部キャンパスなどが加わり、グエル邸やサン・ジュゼップ市場（la Boqueria）といった観光名所が所在することもあって、非常に活気がある地区となっている。

このラバル地区に位置する公立小学校の一つが、ミラ・イ・フンタナルス（L'escola Milà i Fontanals）である。19世紀カタルーニャの知識人の名を冠するこの学校は、第二共和制下の1931年に、著名な教育者であったロザ・サンサッ（Rosa Sensat）を校長として開かれた。現在は、言語だけでなく、文化・習慣・宗教が多様な児童生徒およそ400人が学んでいる。言語的超多様性のただ中でカタルーニャ語イマージョンを実施している点が、この学校を際立った存在にしている。以下に続く同校のロザ・ククルイス（Rosa Cucurulls）校長へのインタビュー（2023年3月7日、ミラ・イ・フンタナルス小学校校長室で実施）では、教員の視点から見た、同校における言語の扱いを知ることができる。

＊　＊　＊

ミラ・イ・フンタナルス小学校 校長 **ロザ・ククルイス**さん

Rosa Cucurulls

1998年にミラ・イ・フンタナルス校に着任する。地理歴史学の修士号を持ち、就学前教育および初等教育、英語教育を専門とする。様々なコーディネータ職を経て、7年前から校長を務める。校長への就任以来、教育変革のための芸術教育といったそれまでの路線を引き継ぎつつ、教育や組織運営におけるDXを主導してきた。「素晴らしい学校運営チームに恵まれたおかげで現在のさまざまなプロジェクトがうまく機能している」とのことだが、校長本人のイニシアティブが果たす役割も間違いなく大きいと思われる。

■■■多様性を通じて責任ある市民を育てる

――（塚原信行）親が子どもを学校へ送り迎えしている様子を見ていると、そのほとんどが移民ではないかと思えるのですが、何人の外国籍生徒が在籍しているのですか？

残念ながら教えることはできません。具体的な数字を教えることは禁じられているのです。

――なぜですか？

それを禁じる政令[3)]があるのです。

ミラ・イ・フンタナルス小学校の中庭。校舎はバルセロナ市の文化財として登録されている。

だからといって、学校を取り巻く文化的・言語的・宗教的多様性について、学校としての立場を公にすることができないというわけではありません。

――例えば、どのようなことですか？

わたしたちは、多言語使用を促進し、外国出身生徒の家庭言語を認め、その使用を推奨しています。生徒たちが持つ、自身の文化や言語に関する知識を価値あるものとみなし、教育活動や学校行事に取り入れています。学校行事への参加を通じて、生徒の家族も巻き込んでいきます。例年とても好評なのが、「みんな同じように違う（Tots i Totes som iguals de diferents）週間」です。これは、生徒の家族が、出身国についての授業を行うものです。内容は、料理、絵画、造形などのワークショップ、自文化についてのプレゼンテーション、特定のテーマについてのおしゃべり、昔話の読み聞かせや歴史の話などです。

――なるほど。では、そうした活動の基になっている考え方はどのようなもので

すか？　特に学校に存在する言語的多様性については、どのように捉えていますか？

言語的、宗教的、文化的、そしてエスニックな多様性を通じて、生徒たちが世界に対する批判的視点を持てるようにしなければなりません。グローバル化した世界で、わたしたちの生徒が責任ある市民として生きることができるような意識を養う必要があります。多様性は、一方では豊かさの源泉ですが、他方では、まとまりがありつつ多様である社会を目指す挑戦も意味します。

――複雑な課題ですが、言語的多様性は、宗教や文化に関する多様性とどのような関係にあると考えていますか？

生徒たちの言語の多様性を認めることを通じて、それ以外の多様性も理解させるようにしています。また、それ以外の多様性に関する気づきを通じて、言語能力を伸ばし、言語的な偏見やステレオタイプから自由になることもできます。多様性は、文化的な豊かさの源泉なのです。

――その考え方を実践するのは難しいですよね。どのように実践しているのですか？

生徒たちの間にある多様性を前にして、学校は明確な方法論をもって組織的に対応することを余儀なくされました。それは、すべての生徒が、学業で成功を収め、自分の興味・動機・能力に応じて社会の一員となる準備に必要なことです。具体的には、「多様性への対応プラン（Pla d’atenció a la Diversitat）」を作成しています。これは、教育の組織・方法・評価に関する総合的な内容で、「受け入れプラン（Pla d’acollida）」や「個別指導プラン（Pla d’acció tutorial）」といったさらに小さなプランから構成されています。こうした一連のプランを通じて、生徒たちの言語能力や認知能力、教育といった側面だけでなく、情緒や感情といった側面にも対応しています。

――かなり綿密に計画されているという印象ですが、これらのプランは何に焦点をあてているのでしょうか？

例えば複言語能力です。最近、カリキュラムが新しくなったのですが、そこでは、「複言語能力について考え、民主的な共生を実現するために、言語的・文化的多様性を知り、評価し、尊重する」といった項目が含まれるようになりました。生徒たちが、21世紀の言語的・文化的に多様な社会にさまざまな場面で参画し、個人としても集団としても幸福な生を追及できるように準備をさせることが目的です。複言語能力に焦点を当てるのは、生徒たちが自身の言語について持っている経験が新しい言語の学習に役立つだけでなく、自身の言語レパートリーを豊かにし、文化に対する好奇心や感性を発展させるという考え方に基づいています。

■■■教員の複言語主義的視点と能力が土台

――そうしたカリキュラムを実施するためには、教員がとても努力する必要があると思います。そのためには、基本となる考え方が教員の間でしっかりと共有されていなければならないのではないでしょうか？

そうですね。成功の鍵は、繰り返しによって感性を高めること（感作）、合意、トレーニングです。まず、すべての教員を対象として、学校の言語的多様性という現実について繰り返し確認していくことはとても重要です。日々の教育活動にもインターカルチュラリズム的視点を取り入れるように努力しています。わたしたちを取り巻く多様性を認識し可視化することから始め、すべての生徒がそういった情報に等しくアクセスできるように、文化間の対話や積極的なインタラクションをすすめています。

次に、教員チームの合意が土台になります。これまでの経験からは、教員全員の参加と包摂のためには、分散されたリーダーシップが必要です。分散されたリーダーシップは、わたしたち教員の間でより深く効果的なつながりを生み出します。もちろん、生徒の家族や、関係団体の合意も重要です。

最後に、教員の言語的トレーニング〔訳注：単に「○○語ができる」というだけではなく、例えば複言語主義的考え方や教育現場におけるその適用なども含む〕です。教員が十分な言語的トレーニングを受けることで、学校の方針に応じた組織的・方法論的変更にも対応できるようになります。技能面に関する教育を充実させることにもなりますし、自らの教育活動を振り返り、改善していくことにもつながります。教員は教授言語に関する高い能力を持つ必要がありますし、生徒たちの複言語能力養成のためには、自らが複言語能力を持つ必要があります。複言語主義的視点や方法論に関する知識とその適用、各種プラン策定への協力、学校の「言語プロジェクト」の適用と評価、といったことに必要な能力も求められます。

――興味深いです。しかし、非常に高い能力を教員に求めることになるのではありませんか？

本校の教員は、ここ数年の間に、自治政府教育省が提供する、言語に関するさまざまなトレーニングコースに参加してきました。たとえば、読書推進のためのイノベーションプロジェクトなどです。現在は、他の複数の学校と共同で、優れた実践例を共有したり、フラットな関係での教員研修を行う、「基礎能力ネットワーク（Xarxa de Competències Bàsiques）」に参加しています。

――では、あらためて、基本となる考え方を説明してもらえますか？

成熟した社会は、同化主義よりも先

に進まなければなりません。同化主義では、移民は移民先の文化やアイデンティティをそのまま受け入れ、自身の文化やアイデンティティを捨て去ることになります。また、多文化主義でも十分ではありません。共存と寛容という枠組みで文化的多様性を認める多文化主義は同化主義よりはだいぶマシですが、必ずしも文化の間でのインタラクションがあるわけではないからです。完全なインターカルチュラリズムの状態が必要です。基本的権利が保障され、社会的不平等と差別の再生産がなく、個人間の関係が重視されるような状態です。

――そうした考え方を教育現場で展開することに困難を感じたことはありませんか？

こうした考え方に基づいて言語能力を重視することの利点は、組織レベルでは徐々に浸透してきています。また、この考え方に基づく教材や資金、人材も増えてきています。とはいっても、こうしたことに馴染みのない教員があたらしく着任する場合などは、やはり簡単ではありません。そうした教員には、これほどの多様性がある環境で働くことは、職業的な意味だけではなく、個人の経験としてもとても恵まれたことである、ということを理解してもらうようにしています。困難があると同時に、すばらしい機会でもあるのです。

――しかし、すべての教員がそのように考えるとも思えないのですが。

これほど豊かな多様性がある環境で働いた経験がない場合、多様性に関する無知は、根拠のない恐れや不快さに転換されがちです。そのため、最初は、不便さや不利に向き合わなければならないという考えを持っていることが多いです。しかし、一度内部に入ってしまうと、多様性は豊かさや知恵であり、人を鍛え、将来の成功を引き寄せる道具だということに自然な形で気がつきます。もちろん、こうした気づきのプロセスには、他の環境では求められないような努力が必要となりますが、得られるものは努力を十分に埋め合わせてくれます。教育がうまく行くためには、ラバル地区内部の教育コミュニティや諸団体、外部の教育機関や教育制度全体が、ともに責任を負い、こうした考え方を共有することが必要と言えるでしょう。

――非常にやりがいがありますね。

生徒たち自身の言語を維持し強化することは、あらゆる教育制度にとって、一つの挑戦だと思います。カタルーニャでは学校環境に生徒たち自身の言語を取り込んでいますが、これは、新しくやってきた生徒たちの受け入れを改善し、家庭言語を価値あるものと認め、インターカルチュラリズム教育をすすめるだけでなく、カタルーニャ社会が、スペイン語や英語といった大言語やカタルーニャ語だけでなく、それ

以外のさまざまな言語でもコミュニケーションを行う、真の複言語市民を得るという重要な目的のためなのです。

■■■それぞれの生徒の言語を顕在化させる授業実践

――具体的な教育活動ではさまざまな言語をどのように位置づけていますか？

外国出身の生徒が学校教育において成功を収められるかどうかは、その生徒の言語と文化に価値を認めるかどうかにかかっています。ですので、生徒の言語や文化を学校の活動に顕在化させ、カリキュラムへ取り込むことが大事です。新しく国外からやってきた生徒は、優れた言語能力を持っているということが出発点です。こうした生徒が持つ、自言語に関する知識と、その言語で発達させた能力を、学習言語の知識を得るために活用し、言語間での能力の転移を促すようにしています。第一言語の能力は、第二言語の習得の鍵であり、第一言語の能力と建設的なアイデンティティ構築との関係は、明白だからです。

――そうした教育実践には他にどのような利点がありますか？

生徒の言語を学校の活動で顕在化させることによって、学校と家庭という2つの環境の間に連続性が生まれます。自尊心を高めることにつながり、肯定的な自画像を得る助けにもなります。こうしたことがなければ、学校全体の取り組みは成功しません。

――さまざまな科目や場面で多様な言語を扱うために、どのようなことをしていますか？

組織的・方法論的・教育的にさまざまな手法を用いて、多様な言語を扱う準備をします。そのうちの一つは、チームティーチングです。デザイン、計画、実施、評価、考察といった学習過程のすべてにおいて、2人の教師が協働します。個別対応がしやすいように、あるいは、特定の分野に関する学習を強化し、自律性を養うために、クラスを半分にわけることもあります。また、複雑な学習を生徒たちが自分のリズムでうまくこなせるように、全員を小さなグループにわけ、2人の教師が手分けして見て回ることもあります。さらに、文化や言語に関する実習を行う際には、習熟度や学年が異なる生徒を組み合わせてグループをつくり、グループ内での関係作りや役割分担、協力のための方略などを学ばせることもあります。

――他にはどのようなリソースや実践がありますか？

取り出し教室もあります。人間関係や感情的発達、言語的発達にとって適切な支援を行うためです。所属学級との関係が損なわれないよう配慮しつつ、学習言語であるカタルーニャ語の習得を集中的にサポートします。就学前児童については、発音練習のクラスを優

先的に割り当てます。このクラスでは、発音に関係する舌や唇、あごの筋肉の動きについてトレーニングします。いくつかの音声テストを利用して、児童が発音を上達させる上での困難を早期に発見できるようにしています。また、この年齢では日常生活で大人の真似をしつつ自然で自発的な発話を学んでいくために、シンボルによる遊びが重要な役割を果たしています。他には、「人の輪」空間が特に重要です。これは、輪になって集まり、お話や詩を読んだり、なぞなぞを出し合ったり、あるフレーズの前半を誰かが言って、別の誰か後半を言うゲームをしたりという、口頭でのアクティビティです。もちろん、各教室には辞書や児童向けの本が置いてあったり、文字表やモノの名前のポスターが貼ってあったりします。

――学年が上がるにつれて、そうしたアクティビティも変わっていくのですか？

そのとおりです。小学生の場合はペアワークで、1人が先生役、もう1人が生徒役をします。同じ学年同士のペアの場合もあれば、違う学年の組み合わせの場合もあります。また、クラス全体で共通の目標に向かうアクティビティも行います。パネルディスカッション、討論、ブレインストーミング、会話などを通じて、言語能力を伸ばしていきます。こうした方法により、一人一人の参加を促し、お互いの話を聞くということを学び、自信もついていきます。具体例を少し挙げてみましょう。2週間に一度、5年生が3年生に、6年生が4年生に本の読み聞かせを行います。毎日、2年生が5歳児クラスに、給食のメニューの読み聞かせを行っています。習慣づけのために、小学生には毎日30分、就学前児童には毎日15分、読書時間が設けられています。もちろん、学校には図書室がありますし、ラバル地区の図書館への訪問も行っています。図書館への訪問では、読み聞かせのほかに、図書館の役割や使い方についての説明を受けます。朗読やインタビューを録画したりといった情報機器を使う活動もあります。

――言語に対する意識を高める活動をカタルーニャ語で行いつつ、学校の日常生活のあらゆる場面で多言語を用いるようにするのですね。

ええ、生徒自身の言語を教室で顕在化させるため、さまざまな活動を行っています。例えば、生徒たち自身の言語で転入生への歓迎のことばや転出生への送別のことばを送ったり、生徒の名前をラテン文字と生徒の言語で使われる文字（例えばアラビア文字）で書いたり、お互いの言語の特徴を知る機会を設けたり、家庭では自分の言語を使うことを促したり、学校に入学した最初の時点から生徒の言語で対応したり、といったことです。他にも、教員をサポートするために、生徒たちの言

語に関する基本的な情報をまとめた資料を作成しています。この資料を使って、生徒の言語とカタルーニャ語（あるいはスペイン語）がどの程度違うのか／似ているのか、ということを知ることができます。この情報によって、生徒が学習をすすめる際に、言語に関してどのような問題が生じうるかを、教師がある程度事前に考えることができます。

――多言語使用環境にあわせた方法論ということですね。

さらに、“Endavant”という名前のデジタル学校だよりが重要な役割を持っています。この学校だよりと学校のウェブサイトには、生徒たちの言語に関するコーナーがあり、生徒たち自身がICT機器を用いながら編集作業に参加しています。また、生徒たちの言語で行う学外活動もあります。活動をサポートする外部講師と学校との間で定期的なミーティングを持ち、外部講師にも学校行事（文化行事や遠足など）に参加してもらうなどしています。

――活動の幅が非常に広いですね。どのようにして可能になっているのですか？

自治政府教育省は、「出身地の言語と文化に関するプログラム」[4] を準備しています。これは教育機関が生徒の言語と文化に価値を認め、その学習をサポートするためのプログラムで、このプログラムを通じて、これまで述べてきたような一連の活動を授業内外で行えるようになります。また、本校では家庭および関係者とのコミュニケーションプランを整備しており、バルセロナ市あるいは同市の教育コンソーシアムから通訳者やメディエータの派遣を受けることができるようになっています。週に一度、生徒たちの言語のうち需要が高い言語を話すメディエータの訪問もあります。

■■■英語の位置づけ

――カタルーニャ語やスペイン語、また生徒たちの言語とは異なり、学校生活で英語は日常的には使われていませんよね。英語についてはどのように位置づけていますか？

英語は学校の中でも外でも、日常的に使われる言語ではありません。しかし、カタルーニャの教育制度は、すべての生徒に対し、義務教育が終了する時点で、自言語がなんであるかにかかわらず、2つの公用語（カタルーニャ語とスペイン語）をマスターし、少なくとも1つの外国語の知識を持つことを求めています。これはCEFR（外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠）で定められている能力を達成するためです。本校では、あらゆる角度から現在の言語教育カリキュラムについて検討し議論した結果、3つの言語を統合的に扱う計画を策定しました。これは、就学前児童を対象とし、学習の大きな目標を、個

別のカリキュラムに反映させたもので、本質的な到達目標を定めています。この計画は、本校の教員すべてが共有する参照点となっています。現在では、児童が電子機器を使いこなし、学校の内外で言語を学ぶことが可能となっています。こうした環境では、就学前児童は支配的言語である英語と継続的に接し、気づかない間に英語に染まっていることもあります。重要なことは、デジタル倫理や仲介能力、責任感に関するリテラシーを身に着けさせるための働きかけを継続することです。

■■■プロジェクトの連関で社会にひろがる教育の場

――ところで、さきほど話に出た「言語プロジェクト（projecte lingüístic）」とは何ですか？

各学校は「言語プロジェクト」を策定します。これは、生徒とその環境に関する社会言語的現実に基づいて具体化するもので、学校における言語教育および言語使用に関するさまざまな側面をまとめたものです。具体的には、言語の扱いと使用のための基準、生徒の複言語能力獲得のための方略の基準、学校に存在するさまざまな言語や文化の学習を促す方策、新しくやってきた生徒の個別受け入れの基準、といった内容を含みます。もちろん、カタルーニャ語が学習言語であり参照されるべき言語であるという点は常に考慮されています。

――言語プロジェクトは、その他のプロジェクトとも関係していますか？

本校の場合、言語コミュニケーション能力の向上と読書習慣の定着を図る「読書推進プロジェクト（Impuls de la lectura）」のような、言語プロジェクトと直接関係するイノベーションプロジェクトを策定しています。他にも、創造性・想像力・社会的包摂を強めるツールとしての芸術教育を推進する「ヨーロッパ・ミューズ・プロジェクト（Projecte europeu MUS-E）」があります。これは、さらに規模の大きな「MilaRmonitzaTプロジェクト」**（写真）**の一部で、芸術を学ぶのではなく、芸術を通じて学ぶことを重視しています[5)]。芸術は普遍的言語であり、合唱やミュージカル、楽器演奏などを通じ

MilaRmonitzaTプロジェクトによる
チェロの練習風景

て学校や社会の一体性を高めることができます。また、すでに述べたように、ラバル地区の図書館とも協働しており、図書交換プロジェクトや物語演劇化プロジェクト、著者との交流を図る読書クラブといった活動を進めています。そして、すでに冒頭で触れましたが、「みんな同じように違う（Tots i Totes som iguals de diferents）週間」では生徒の家族が中心となっており、「お客さん」ではなく、教員らとともに責任を持つ立場で参加しています。

――学習言語であるカタルーニャ語を紐帯としつつ、学校生活のあらゆる場面で生徒たちの言語を顕在化させる努力がプロジェクトベースで行われているということがよくわかりました。本日はありがとうございました。

＊　＊　＊

注

1) 便宜的に「小学校」と呼んでいるが、教育制度としては就学前教育（3歳～5歳）も一体化している。

2) ここではスペイン全体のデータと比較するために国籍データを用いているが、国外での出生者率について見ると60％に上昇する。スペインは、ラテンアメリカの旧植民地諸国やアンドラ、フィリピンなどとの間で二重国籍を認めているためである。

3) 「2021年2月16日カタルーニャの教育機関における教育プログラムおよび入学手続きに関する第11号政令（El DECRET 11/2021, de 16 de febrer, de la programació de l'oferta educativa i del procediment d'admissió en els centres del Servei d'Educació de Catalunya）」の第6条2項に「教育機関は（自発的にであれ第三者からの依頼に基づいてであれ）学校隔離を押しとどめる努力に否定的な影響を与える情報を流布してはならない」とあり、具体的な項目として「学校毎の学力テストの結果、特定の教育サポートに関する必要性、児童生徒の国籍、学校の社会的（階層的）構成、定員に対する需要、奨学金等」が挙げられている。

4) 「出身地の言語と文化プログラムの創設と広報に関する2018年11月20日省令（RESOLUCIÓ ENS/2754/2018, de 20 de novembre, per la qual es crea i dona publicitat al programa Llengües i Cultures d'Origen）」

5) 具体的な内容についてはYouTubeに紹介ビデオがある。https://bit.ly/3KUg2cf

資料

Linguapax (2019) *Diversitat lingüística i cultural: un patrimoni comú de valor inestimable*. https://bit.ly/45aI3nk